

米国連邦政府、フッ化物の危険を“カミング・アウト” ～ 50年ぶりに飲料用水道水の中のフッ化物の量を減らす方向へ ～

原発関連の記事や情報を掲載から一転、タイトルが「フッ化物」になって???と感じた人もいるかもしれない。フッ素は原子力関係者にとって実は重要な物質である。フッ素の特性なしに原爆製造はできないという関係にある。学校関係者の方には既に周知のことだが、今、全国中で「フッ素洗口」キャンペーンが展開されている。多くの小中学校で給食後、フッ素化合物(劇薬)が入った水溶液でうがいをする風景が日常的になりつつある。化学系の知識がある人であればフッ素が危険性の高い物質であることは常識なのだが、虫歯予防を目的に半ば強制に近い状態で学校現場に入りつつある。アメリカは「フッ化物」を水道水に入れてきた。表向きの目的は「虫歯予防や骨を強くする」ということである。「フッ化物」利用の本家である米国連邦政府が、初めてその危険性を認め50年ぶりに飲料用水道水の中のフッ化物の量を減らす方向へ動き出す。一体何があったのか？

アメリカには情報公開制度に基づき政府内の機密文書を一定年限で公開する仕組みがある。**原爆製造を推進した悪名高き「マンハッタン計画」**というものがあがるがこれに関連する機密文書の中に「**フッ化物**」が登場してくる。この機密ファイルに記された事実によりアメリカ市民は衝撃を受け、大きな社会問題となっている。50年の長きにわたって水道水に「フッ化物」を混入し続けてきた政府に対し、批判が渦巻き米政府も対応せざるを得なくなっているのだ。

隠され続けて「フッ化物」の問題を告発してきた**ジョエル・グリフィスクリス・プライソンの本「奇怪な三角関係 フッ素と歯、そして原爆」**翻訳 村上 徹 (歯科医師・医学博士) の中から概要を伝える。

原爆開発とフッ素化合物汚染の隠蔽 ①

ウラン濃縮に用いられたフッ素

鉱石として採掘される天然ウランは殆どが U238 であるが、0.7%の割合で同位体の U235 が存在する。**原爆に必要な核分裂に利用できるのはこの U235 だけ**である。従って、多量の U235 を取り出すためには、この0.7%の割合を化学的操作で増加させる、つまり濃縮する必要がある。このために考案されたのが、**ウランをフッ化水素と化合させて気体の6フッ化ウラン(暗号名ヘクス)にし、比重の差を利用して U235 を U238 と分離**する方法である。この方法はニールス・ボーアでさえ「合衆国を一つの巨大な工場にしてしまわないかぎり無理だ」と思っていたというが、原爆の製造に関与した多くの天才的頭脳がこれを可能にした。

ここで著者が述べているのは、マンハッタン計画のために化学会社デュポンがウラン濃縮に必要な何百万ポンドのもフッ化水素の製造を請け負い、それが漏洩して作業員や工場の周辺に深刻な公害を引き起こしたという、このフッ化水素の製造にまつわる秘話なのである。

さて、U235 を分離した残りカスの U238 は、当面何の利用価値もないまま廃棄物として夥しい量が放置されていたが、固く、固く性質に着目され、最近になって無料で企業に払下げられ、金属に精錬されて砲弾や戦車の装甲に使用されるようになった。これが劣化ウランである。

劣化ウラン弾はイラクとの湾岸戦争で始めて大量に使用され、目を見張るような戦果をあげたのは日本でもよく知られている。厄介なことにこの劣化ウランには、余り強くはないものの放射能があり、その半減期は何と 45 億年である。

*現在、イラクでは劣化ウラン弾の粉塵を吸い込み内部被ばくした子どもたちの間にガンが多発している。奇形・知能障害なども深刻になっている。(神 追記)

わき上がる疑念

合衆国が子どものむし歯を減らすために水道にフッ素を添加してから50年ほどたったが、**機密リストから外された政府の公文書によると、フッ素と核時代の幕開けとの間に驚くべき結託があった**事が明らかであり、今なお論争されているこの公衆衛生の一手段のルーツが新しい光で照らし出されている。

合衆国では全体の水道の約2/3がフッ素化されている。しかし、多くの自治体は今なおその実施に抵抗しており、政府のいう安全性に不信を投げかけている。

合衆国が世界で最初に原爆を製造して優位にたった第2次世界大戦以来、公衆衛生の指導者たちは、一貫して、フッ素は安全であり子ども歯にはよいものだと言いつけてきた。しかし、この安全だという判断は、私たち

が入手にした第2次大戦中の原爆の製造に関係した当時の**マンハッタン計画の秘密文書**を見てみると、大いに再検討しなければならない。

これらの文書によれば、フッ素は原爆製造のカギとなる物質であった。**核兵器の製造には欠かせないウラニウムやプルトニウムの生産には、何百万トンものフッ素が不可欠**であった。このようにして、**最も毒性が強い物質の一つであるフッ素は、合衆国の原爆の製造計画の中で、労働者や工場付近の地域住民に健康障害をもたらす物質として急速にその姿を現してきた**。秘密文書はこのことを明らかにしている。

さらに内幕をあばいてみよう。

少量のフッ素は人間にとって安全だという証拠は、そもそも原爆計画の科学者らにより意図的に作り出されたものであり、彼らは極秘裡に、フッ素により傷害を受けた市民らの提訴に対抗する訴訟の請負人のために、「訴訟が有利になる証拠」を提供するよう命令したのであった。

そのためには人体実験が必要だった。原爆計画の科学者たちは、1945年～1956年にニューヨーク州ニューバーグ市で実施された合衆国のもっとも広範な水道フッ素化の人体研究のなかで主導的な役割を果たした。その後、「F計画」という暗号で呼ばれている研究のなかで、彼らは州保健部の総力をあげた協力の下に**ニューバーグ市民の血液や組織を集めて分析した**。

1948年に、F計画の科学者の手でアメリカ歯科医師会雑誌に発表された報告書の極秘の原文によると(その極秘版は我々が入手したものである)、**フッ素による健康傷害の数々の事実が、合衆国原子エネルギー諮問委員会の手で検閲されていた**という事実がよくわかる。この委員会こそ、冷戦下における最も強力な国家機関だったのであり、その理由は国家の安全のためなのであった。

原爆計画の機密文書には、他にもこんなことが書かれている。1944年4月29日のマンハッタン計画のメモ。**「臨床的所見からみると、6フッ化ウランにはかなり強い中枢神経的作用があるようである。成分としてF(フッ素の暗号)は、T(ウランの暗号)よりも、よりその因子となりやすい。」**

極秘のスタンプが押されたそのメモは、マンハッタン計画の医学部門の首席であるスタッフフォード・ワレン大佐に提出された。ワレン大佐は、中枢神経に対する動物研究を許可するように要請された。「これらの成分を扱う仕事が不可欠な以上、これらに曝露されるとどんな心理状態が起こるかは、前もって知っておくことが必要である。これは、特定の誰彼を保護するということばかりではなく、**取り乱した作業員が仕事をいい加減にし、そのために他人を傷害する事になるのを予防するという点からも重要である。**」

同日、ワレン大佐はその研究計画を承認した。当時は1944年であって第2次大戦が最も熾烈を極め、世界で最初に原爆を持つとする国家間の競争が最高潮に達した時でもあった。そんな**重大な局面にフッ素の中枢神経研究が承認された**のを考え合わせてみれば、メモに沿って提案書に述べられていた臨床的所見なるものは、よほど重大なものだったに違いない。

しかし、その提案書は合衆国国立公文書記録のファイルにはないのである。「メモが見つかったとしても、それが言及している文書はありません。おそらく、まだ秘密扱いとなっているのでしょう。」と、メモが見つかった公文書館アトランタ支部の主任書士であるチャールズ・リープは述べている。同様に、マンハッタン計画中で実施されたフッ素の中枢神経に関する研究の結果もファイルにはない。

ここに記された事実は超ど級のスクープである。何も知らず50年もの間、中枢神経に異常をきたす毒物である「フッ化物」をアメリカ国民は飲まされ続けていたのだ。多くの子どもたちに「フッ素症」と呼ばれる歯の異常が報告されているが、それどころではない。中枢神経系に異常をきたすという重大な事実が明るみに出れば「原爆開発」に多大な影響が出ることを懸念し、壮大な捏造と隠蔽工作を行ってきたということだ。その歴史の闇が明るみに出たのだ。

これまで「フッ素洗口」をことさら推奨してきた方々は、今後どう対応するのか楽しみである。今まで同様、「フッ素洗口・健康安全神話」を振りかざすのだろうか。米国政府がやったように、あらゆる機関や法的手段を用いて反対論を弾圧していくのだろうか。子どもたちの命や健康と直接向かい合う学校教育関係者、とりわけ市町村教育委員会や学校管理職の方々は、今一度、事実を直視して判断する必要があるのではないかと。

地震列島日本に原発を次々と建設し、間接的な核保有大国としての体制整備と、エネルギー資源獲得の一举両得を達成するために壮大な「原発安全神話」を捏造し続けた構図と全く同じだ。神話をそれらしく装うために用いられる手法は決まっている。「科学の権威」という衣を着せて見せることだ。そのためには金に糸目をつけず御用学者を飼いならすことが何より重要となる。福島第1原発事故の発生で混乱した原子力マフィアの皆様は、やっきになってTVに次々と専門家とよばれる学者様を登場させた。しかし、見落としていた点があった。ネットによる情報共有の時代にあつては、たちどころに裏を調べられる。今、彼らは姿をあまり見せなくなった。ウィキリークスの出現が為政者にとって如何に脅威の存在であったか、因らざる原発事故で知ることになっただろう。となれば次に打つ手は情報規制という流れになる。お隣の国では不都合な真実は直ぐブロックがかけられるが日本も危うい気がする。さてさて、この通信にはブロックがかかるのはいつになるだろうか？

～ 提供「ジンリクス」執筆担当 オッサンジン ～